

「床を担いで歩きなさい」 マタイによる福音書 5:1-9

8月中は、イエスさまの語られた「山上の説教」を通して、「平和」に関する教えを共に学んでまいりましたが、今日からヨハネ福音書に戻って、イエスさまのなさった御業を中心に共に学んでまいりたいと思います。

今日の聖書の箇所は、イエスさまが、ユダヤ人の祭りのためにエルサレムに行かれた時のことです。エルサレムの神殿の「羊の門」と呼ばれる門のそばに「ベトザタ」と呼ばれる池があって、イエスさまはそこに行かれたのです。この「ベトザタ」は、以前の聖書では「ベテスタ」となっていました。これは写本の違いによるものですが、「ベテスタ」という言葉の意味は、「恵みの家」とか「慰めの家」という意味です。

その池の周りには、5つの回廊がめぐらされていて、そこに多くの病人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、横たわっていたのです。「回廊」とは、屋根のついた細長い廊下のような建物です。池の周りに、なぜこのような建物が建てられ、大勢の病人や障がいをもった人たちが集まるようになったかということ、この池は時々風もないのに、水がひとりで動くことがあって、その時真っ先に水に入った人は、どんな病気にかかっているにも治る、という言い伝えがあったためです。この説明は、「ヨハネによる福音書」の最後、21章の終わり(p.212)に、「底本に節が欠けている箇所の異本による訳文」として、このように記されています。「彼らは、水が動くのを待っていた。それは、主の使いがときどき池に降りて来て、水が動くことがあり、水が動いたとき、真っ先に水に入るものは、どんな病気にかかっているにも、いやされたからである。」写本によってこういう説明の入っている聖書もあるということです。

今考えると、水が時々動くということは、池の底に時々水がわき出る「間欠泉」のようなものがあつたのではないかと思われるのですが、当時の人々は、大変不思議に思い、時々天使が舞い降りて来て水浴びをするためではないかと信じ、水が動いた直後に池に入ると、天使の力によって病気が癒されると期待し、そのように言い伝えられるようになったのでしょう。「迷信」とか「伝説」は、このような人々の切なる願いや期待から生まれるのです。そのために、各地からたくさんの病人たちが訪れるようになり、そこに回廊まで造られるようになったのです。病や障がいに苦しむ人にとって、治りたい、良くなりたいという気持ちは痛いほどよくわかります。少しでも効き目があるという噂があれば、「藁にでもすがりたい」気持ちで集まるのです。

秋田の県北に「玉川温泉」という温泉があります。昔、子どものころ父親に連れられて行った時は、山の中にひなびた小さな宿屋が一軒あるだけでした。30年ほど前、弘

前にいたころ、たまたまそこを車で通って一泊したのですが、以前とは全く様変わりしていて驚きました。大きな宿泊施設が出来ていて、満員の湯治客であふれていました。小さな部屋が一つだけ空いているというので、泊めてもらったのですが、宿泊している人たちはみな、がんを患う患者さんばかりでした。そこで取れる北投石という石がラジウムを含んでいるということから、有名になり、がんに効くという噂が広まって、全国から大勢の患者さんたちが治療のために集まるようになったのです。食事の時間、食堂に集まって一緒に食事をするのですが、お互いどこから来たかとか、どこが悪いとか、あと何年生きられるのか、というような話が聞こえて来て、食事ののどを通らない思い気持ちになりました。翌朝、外に出てみると、みんなそれぞれに、ゴザやマットのようなものを宿屋の周りの地べたに敷いて、横になっているのです。ラジウムを含んだ土が温泉の地熱で温められて体に良いというわけです。どれほどの効果があるのか分かりませんが、私は、その姿を見て、このベトザタの池の周りに横たわっている病人々の姿を思い起こして、心痛む思いがいたしました。

ベトザタの池の場合、さらに悲惨なのは、「水が動いたとき、真っ先に水に入った者」が癒されるという言い伝えのゆえに、そこに激しい競争が生じたということです。察するに、そこで繰り広げられる光景は、まるで地獄絵を見るようではないか、と思います。ある先輩の牧師は、この箇所を解説した文書の中で、水が動いたときのことを想像して、「盲人は見えない目を見開き、足なえは萎えた足を引きずり。流れ出る膿(うみ)は地面に後を引き、突き出たあばら骨はふいごのように喘ぐ。先立つ者の足をつかみ、抜け落ちる髪の毛を引きつかむ修羅場。あまりにも露骨であり、そしてあまりにも切実である。…とうてい正視することができない」と書いています。それは「恵みの家」とか「慰めの家」という池の名とは、ほど遠い争いの「修羅場」です。

エルサレムの神殿の近くに、このような悲惨な場所があることを、どれだけの人が知っていたのでしょうか。神殿に仕える祭司やレビ人、律法学者たちは、おそらくこの場所を見て見ぬふりをして通り過ぎるか、この場所を避けて通っていたのではないのでしょうか。そして、祭りのためにエルサレムを訪ね、神殿で礼拝を捧げた人々も、おそらく誰もここまで足を運ぶことはなかったと思います。神殿のきらびやかさと賑わいとは対照的に、このベトザタの池のほとは、闇と静けさに包まれていたのです。

しかし、祭りのためにエルサレムに来られたイエスさまは、敢えてこの場所に足を運ばれたのです。そして、その大勢の病む人々の中の一人に目を止め、声を掛けられたのです。その人は38年もの間、病気で苦しんできた人でした。38年という年月は、当時の年齢からすると、人生の大半です。彼が何歳で、あとどれだけ生きられたかわかりませんが、病気が治ることを諦めていたとしてもおかしくない年月です。しかし彼は、

なおもこの池の回廊の片隅に横たわって池の水が動くのをじっと待っていたのです。

6節を見ると、「イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、『良くなりたいか』と言われた」とあります。

「良くなりたいか？」皆さんはこのイエスさまの言葉をどう思いますか？

38年間も病気で苦しみ、水が動くのを待ち続けている人に「良くなりたいか」と問うということは、当たり前のことを問うている「愚問」のように思われます。私が、もしこの病人の立場であったら、「良くなりたいか」と問われたら、「当たり前だ」と少し言葉を荒げて答えたかもしれません。多くの註解者は、このイエスさまの問いは、答えを得るための質問ではなく、相手から「良くなりたい」「治りたい」という意欲を引き出すための問いかけだと解釈します。私もそう思っていました。「求めよ、さらば与えられん」と先週学びましたように、求める意欲、「治りたい」という強い気力がなければ治る病も治らないのです。その気力を引き出す問いだと理解していました。

しかし、今回、私は改めてこの箇所を読み直して、イエスさまの「良くなりたいか」という問いは、それだけではなく、もう一つ別の意味が込められているように思いました。それは、「良くなりたいか」という上から目線の詰問ではなく、相手に寄り添うような「良くなりたいでしょう」「治りたいでしょうね」という同意を得る問いかけではなかったかということです。(実際に、高橋三郎はこの言葉はそのように訳すべきだと述べています)。イエスさまは、長い間そこに横たわっている病人のやつれはてた姿に心を痛み、その辛さや悲しみ、誰からも顧みられないその寂しさに寄り添って言われたのです。「良くなりたいでしょう」「どんなにか治りたいことでしょう」と。

人はだれでも、「こうあらねばならない」と一つの立場を押し付けられたら、心を閉ざしてしまうものです。しかし、あるがままの自分を認め、受け入れられた時、心を開いて、自分の苦しみや悩み、悲しみを打ち明けようになるものです。イエスさまから問いかけられたこの病人は「主よ、水が動く時、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りていくのです。」と答えました。

彼はまずイエスさまを「主よ」と呼んで、「だれも私を助けてくれないのです。いつも私は取り残されるのです」と弱音を吐いています。これは、イエスさまに対する全幅の信頼を言い表した言葉ではないでしょうか。こういう自分の内面の弱さ、孤独の悲しみ、みんなから取り残される寂しさを打ち明け、訴えることが出来たということに、彼の救いがあったのです。イエスさまはそこに彼の信仰を見たのではないのでしょうか。

信仰は、イエスさまの前に、自分を繕って、かっこよいところをお見せするのではなく、イエスさまを心から信頼して、自分の心の中にある悩み苦しみをすべて告白して、一切を主の御手におゆだねすることです。イエスさまは、「良くなりたいでしょう」

「治りたいでしょう」と、あるがままの彼を受け入れ、その痛みや悲しみ、寂しさに寄り添うことによって、彼の心を開き、「主よ」と呼びかける信仰へと導いたのです。

この病人の「主よ、…」と呼びかけ、あるがままの自分をさらけ出すこの病む人に、主イエスは、「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」(8節)と言われたのです。

「すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩き出した」(9節)というのです。38年もの長い間、病のために床に臥せっていた彼にとって、これほど大きな驚きはありません。彼は喜びのあまり、踊るようにして立ち上がり歩き出したことでしょう。

イエスさまの救いは、この病人を池の中に入れる手助けをすることではなく、むしろ、彼を長い間引き留めていた池の呪いから解放し、主を信じる信仰によって、新しい命へと歩みださせることでした。イエスさまは言われました。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」(8節)と。これは、病に閉じ込められた長く苦しい暗黒の生活からの解放の宣言であると共に、主にある新たな歩みへの招きの言葉でもありました。

ここでは「床を担いで歩く」ということが強調されています。「床」といっても、ゴザのような敷物のようなものだと思いますが、病気が治ったのに、なぜ今まで身を横たえていた床をもって歩く必要があったのでしょうか。

この後の記事を見ると、その日は「安息日」で、一切の労働を禁じられ、物を運んだり、遠くまで出歩いてはいけなくなっていました。この癒された男が、床を担いで歩き回ったことにより、ユダヤ人たちから問い詰められ、イエスさまの命が狙われるような事態が起きます。それにも拘らず、主イエスが「床を担いで歩きなさい」と命じられたのはどうしてなのでしょう。これは私の推測ですが、自分がイエスさまと出会いによって救われたという恵みを、いつまでも忘れずに、いつも救いの原点を思い続けるように、という意味ではないでしょうか。「床を担いで歩きなさい」。38年間寝たきりの「死の床」から甦らされ「命」へと解放されたその恵みを忘れるな、という意味が、そこに込められているのではないかと私は、思います。

私たちは、あまりにも過去の罪責についてもそうですが、救いの恵みについても忘れっぽいのです。私たちがイエスさまと出会い、イエスさまによって罪赦され、新しい命にあずかったことを忘れるな！ 救われた喜びと恵みを絶えず思い起こし、そこに立ち帰って、常に新しく生きよ！ 「床を担いで生きよ」という言葉から、そのような主のみ声を聴くような思いがいたします。また、「あの池のそばに、今なお床を敷いて水が動くのを待っている、多くの病み苦しんでいる人々のことを忘れるな、彼らの苦しみをも共に担いつつ歩め」そのように、言われているようにも思われます。

自分の救いの恵みを喜び、感謝をしつつ、常に他者の痛みや苦しみを思いやり、共に床を担ぎ、十字架を負いつつ主に従い続ける者でありたい、と願います。 アーメン